

はしがき

現代の受験生にとって、漢文という古典は、決して取り組みやすい受験科目ではない。はっきり取り組みにくい科目と言つてよいのだが、しかし、その取り組みにくさが文章体系としての漢文の難しさに由来するわけではないという点に本質的な問題がある。漢文は一般的には、受験という当座の必要がなければほとんど顧みられることのない、言わば趣味的科目としてしか認知されておらず、そのことが漢文を必要とする受験生の学習意欲をもそぐ結果となつているのだが、問題は、それが受験生の問題というよりも、大きな文化的時代状況としてある程度の必然性をもつているという点にある。

教養としての漢文に接触することに意味を見いだす人間がほとんどいないのである。そして、それは、横文字文化の横行によつて漢字という文字への愛着が薄れつつあること以上に、漢文の作り上げている文化世界、例えば忠孝信義といった価値を中心据えた世界が、私たちの生きている現代という時代から急速に消えつつあるという点に由来している。

つまり、比喩的に言えば、過去を完全に過ぎ去つたものとして葬り去ることによつて、先へ先へと進みゆくエネルギーを作り出している現代という時代が、漢文という世界を博物館の世界に密閉してしまつていたのであり、まさしくそのような時代性こそが漢文への取り組みにくさを作り上げているのである。受験科目としては易しいと言つてよい漢文が、多くの受験生から敬遠されてしまうのも、この点に由来している。漢文化を受容する素地が私たちの生きる世界から消えていく度合にに応じて、漢文は難しくなつていっているのである。

このような状況に置かれていく私たちが、受験科目としてであれ、ともかくも漢文の世界に向きあつていくた

めには、さし当たってはまず、現在の私たちと漢文の作り上げている世界とのはるかなる距離を、はっきり確認することが出発点となる。漢文を読んでいく上で誤読がありうるとしたら、それはこの距離についての無自覚が作りあげるものと考えてよい。漢文の世界は、もちろん中国の古典であると同時に日本の古典でもあり、漢文に象徴される中国文明が、日本の歴史全体の中では、近・現代における西欧文明の果たした役割よりもはるかに大きな役割を果たしたのは事実である。しかし、だからと言って私たちの現在と漢文の世界とが近い距離にあるわけではない。この距離に対する無自覚こそが漢文を誤読していくうえでの一番の落とし穴となる。この距離に対する自覚を、一つ一つの問題に突きあたる過程で、よりはっきりした形にしていくこそが漢文学習の最良の道であり、この問題集がその一助になることを願っている。

もう一点確認しておかなければならないことがある。それは、先に漢文の世界が現在の私たちと遠い距離にあると述べてきたが、遠い距離にあることはその世界が現在の私たちにとって無価値なものであることを意味するわけでは決してないということである。受験漢文という狭い窓口ではあれ、そこから垣間見える中国の古典世界、いや歴史的に積み重ねられてきた中国文化の世界は、日本文化とも西洋文化とも異質な内実を備えており、異質であればこそ私たちの現在が抱える様々な課題を映し出す格好の鑑となりうるということである。漢文を読み解くことの意義もまさしくここにある。

目次

(□)……易
■……標準
■……難

1	「世說新語」德行	……	8
2	「韓非子」內儲說上	……	11
3	「搜神記」	……	13
4	岑參「巴南舟中」	……	16
5	「列子」湯問	……	18
6	「高齋漫錄」·「風俗通義」	……	20
7	「笑贊」	……	22
8	「莊子」山木	……	25
9	「世說新語」規箴	……	28
10	株宏「竹窓隨筆」	……	30
11	王維「送別」二首	……	33
12	「六一詩話」	……	36
13	「貞觀政要」貪鄙	……	39
14	韓愈「師說」	……	42
15	「十八史略」	……	45
16	「史記」田單列傳	……	48

17	陸深「金台紀聞」	……	50
18	起北齋「繡谷春容」	……	52
19	蘇軾「記先夫人不殘鳥雀」	……	55
20	「孟子」梁惠王下	……	58
21	「史記」張敖之列傳	……	61
22	「春秋左氏傳」	……	64
23	錢泳「履園叢話」臆論	……	67
24	賈誼「新書」	……	70
25	陳師道「別三子」	……	73
26	唐庚「家藏古硯銘」	……	77
27	「韓非子」五蠹	……	80
28	「春秋左氏傳」	……	83
29	吉村秋陽「讀我書樓遺稿」	……	85
30	袁枚「黃生借書說」	……	88

▼解答と配点▲

問一 賢人で節義の高い王蠋を、自分の味方にひき入れること。

(25点)

(a・b各7点 14点)

問二 已にして人をして、蠋に謂はしめて曰く。

(a・b各3点、c・d各2点 10点)

問三 オ

(8点)

問四 エ

(6点)

問五 生きながらえて義をなくすよりも、もちろん煮殺される方がよい。

(a・b各6点 12点)

▼本文解説▲

「史記」は、伝説の太古の時代から紀元前二世紀、前漢武帝の時代までの三千年の歴史を記した書である。著書は司馬遷、友人李陵の匈奴降伏を弁護して武帝の逆鱗に触れ「宮刑」にあうが、その屈辱の体験をバネに百三十巻という大著を著したのである。彼は歴史を個人の生涯の集積と考え、王・侯・家来の三ランクに分けて記述したが、それぞれ本紀・世家・列伝という。後世、この手法を「紀伝体」といい、以後の史書の模範的体裁となる。

本文は、万家の邑（領地）に封じようという侵略軍の破格の招請を拒否して「義」に殉じた王蠋のエピソードである。

▼書き下し文▲

燕の初めて齊に入るや、画邑の人王蠋の賢なるを聞き、軍中に令して曰く、「画邑を環ること三十里には入る無かれ」と。王蠋の故を以てなり。已にして人をして蠋に謂はしめて曰く、「齊人多く子の義を高しとす。吾子を以て将と爲し、子を万家に封ぜん」と。蠋固く謝す。燕人曰く、「子聴かずんば、吾三軍を引きて画邑を屠らん」と。王蠋曰く、「忠臣は二君に事へず、貞女は二夫を更めず。齊王吾が諫を聴かず、故に退きて野に耕す。既に破亡すれば、吾存する能はず。今又之を劫すに兵を以てして君が将と爲るは、是れ桀を助けて暴を爲すなり。其の生きて義無からんよりは、固より寧らるるに如かず」と。遂に其の頸を樹枝に懸け、自ら奮ひ腹を絶ちて死す。

▼全文解釈▲

燕が最初に齊に侵入したとき、画邑の人である王蠋が賢人だということを目にして、軍中に命令を下して言った、「画邑の周囲三十里以内には入ってはならぬ」と。それは王蠋（が住んでいること）のためである。（燕の將軍は）しばらくすると使者をやつて蠋に次のように言わた、「齊の人々は多くあなたの義を高く評価している。そこで私はあなたを將軍とし、万戸の土地を領地として与えたいと思う」と。しかし王蠋は固辞した。燕の人（將軍）は言った、「あなたが聞き入れないならば、私は大軍を率

いて画邑の人々を皆殺しにしてくれよう」と。王燭は言った、「忠臣は二人の君主に仕えないし、貞女は二人と夫を改めたりはしない。齊王は私の諫言（『忠告』）を聞き入れてくれなかったのだから、（私は朝廷を）退いて野に下った。もはや齊国が減ってしまったからには、私も生きながらえることはできない。（それなのに）今また兵力で私をおびやかす（その結果、私が）あなた方の將軍となるのは、桀王を助けて暴虐を行う（ような）ものである。生きながらえて義を無くすよりは、もちろん（釜ゆでの刑によって）煮殺される方がよい」と。そして自分の頸を木の枝にかけ、自ら奮い立って首をはねて死んだのであった。

▼解釈のポイント▲

無——「無」は「莫」「勿」とともに「なし」と読んで否定を表すが、「——（スル）なカレ」と読んで「——してはいけない」という禁止の意味で使うこともある。

以王燭之故——「以」「故」ともに理由を表して「——なので、——だから」と訳す。ここは「王燭が住んでいるからである」の意味。

已而「已」一字では「すでニ」と読むが、「已而」は「すでニシテ」と読み、「しばらくして・やがて」の意味である。

使人謂燭曰「使A□□」は、「Aに□させる」と訳す使役形。「使」のかわりに「令」が使われることもある。「謂——」は「——に対して言う・——と話す」の意味。

子——相手に対する敬称。「あなた」の意味。

以子為得「以A為B」は「AをBとする」あるいは「AをBとみなす・思う・考える」と訳す。ここは前者。「あなたを將軍とする」の意味。

封子万家「封」は、「封鎖」というように「閉じる・閉ざす」の意味もあるが、「封建」というように、「領地や爵位を与える」の意味がある。

謝①「礼を言う（感謝）」、②「わびる（謝罪）」、③「辞退する（謝絶）」などの意味がある。ここは③の意味。

不事二君「事——」は、「——に仕える」の意味。

与其A、不如B「A（する）よりは、B（する方）がよい」という比較を表す。「不如B」は「不若B」となることもあり、また「寧Bでも同じ。ここは「生きていて「義」をなくすよりは、煮殺される方がよい」の意味。

固「もちろん・もともと」の意味。

▼設問解説▲

問一 理由は直後に「王燭の故を以てなり」とあるので、王燭が住んでいたのでわかる。そして使者を派遣して王燭に「子を以て將と為し」と伝言させているので、自分の部下にしようという意図をもっていたこともわかる。しかも「万家に封する」という破格の待遇を提示している点に注意する必要がある。それは、齊人が王燭のことを「義が高いとみなしていた」からで